

## 富本一枝におけるセクシュアリティ

渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

## Kazue TOMIMOTO's sexuality

Sumiko WATANABE

尾竹紅吉から富本一枝となつて流さねばならなかつた涙について「ジェンダー・セクシュアリティ研究」における「クイア研究」の視点を視野に収めながら考えてみたい。

「クイア queer」とは本来「変態」に近い意味をもつ侮蔑語だったが、一八八〇年代末からアメリカで性的マイノリティが自らを指す言葉として肯定的に使われ始め、同性愛が連想される場合が多いものの、「正常な規範をはずれた」と見なされやすい性行動・性文化を肯定的に指す用語となつている。異性愛中心主義が「正常」とされて公的に構築されてきた社会にあつて、抑圧されたり、弾劾されたり、無視されたりしてきた多様な性を生きる者が連帯するための画期的な理論と位置づけられ、この論の誕生によつて、対立する二項の一方が優位に立ち、もう一項はそれを補つていふとする説に与えた影響は大きい。

「クイア研究」は一枝と一枝が創刊した『番紅花』を高く評価する。「クイア研究」を取り入れた超書心の論文<sup>(1)</sup>は赤坂香奈子<sup>(2)</sup>、古川誠<sup>(3)</sup>、肥留間由紀子<sup>(4)</sup>論文を引用しながらこの問題を論じていて説得力がある。

## らいてうの変容・『番紅花』の位相

「クイア研究」は、『青鞥』及びらいてうの評価、位置付けを変えた。紅吉との「同性の恋」を高唱していたらいてうはエレン・ケイの影響を受けて母性主義者になると、紅吉否定に変わる。「一年間」（3巻2号、12号）では紅吉を変わり者として侮辱的、愚弄的に描くが四巻四号の「女性間の同性恋愛」（エリス）の前文で紅吉を「先天的の性的転倒者」と決めつけている。奥村博にであうと紅吉との「同性の恋」は嘘で、自分は「ノーマル」なヘテロだと公言している。『青鞥』には女性同士の親密な関係が女性解放に繋がる「新しい女」として表徴される小説が幾つか載っているが三巻に入ると、女性同性愛を「性的墮落」、「変性の恋」とした「レスビアニズムの排除」の傾向が顕著になっている。

「クイア研究」は『番紅花』を「仕事を通して女性の自己実現を追求する」「公的領域への参加によって女性解放を模索する」雑誌として「レスビアン・サブカルチャーの芽生え」と位置づけ、歴史的テクストとして極めて貴重と高く評価する。

『番紅花』は、超書心の論文では「スキャンダル」と書かれているがスキャンダルどころか『青鞥』を愛するがゆえの誰にでも出来ると思われぬ勇氣ある表現だった「五色の酒」「吉原登楼」事件が悪意・揶揄的に喧伝されて、まだ「女徳」から解放されていなかった青鞥社員達の批判・響響を買ったことで退社を余儀なくされた一枝が、その悔しさを晴らす手段としたのが、展覧会入賞画が三百円という破格の高値で売れたその金を資金とした「純芸術雑誌」『番紅花』の創刊だった。創刊は一九一四（大正三）年三月だが、この時代、二〇歳の女性の自力による雑誌創刊は他に例を見ぬ壮挙だろう。創刊号の「編輯室にて」には、創刊に携わった六人の女性について、六人はみな「自分の仕事や職業を有つてゐる」で不断に成長を目指して「錬磨」しているが、足りない部分を助け合つて「仕事なり人間なりを」「高め育てる場としたい」人たちと述べていて、仕事を持つ女同士の成長に向けての連帯をうたっている。

創刊号に一枝は「私の命（詩）」・「夜の葡萄樹の蔭に（詩）」・「自分の生活（手紙）」、K・O署名の「海外消息」を載せている。「私の命」には「太陽」に育まれる「私の仕事」「私の成長」が詠われ、「夜の」からは「異性愛」謳歌者に変身したらいてうの裏切りに対する嘆きが透ける。書簡体の「自分の生活」は見事だ。あなたの愛を「真当の愛」と思い込んで嬉しがっていたがあれは「遊戯的な愛」でした、「あなたは自分に少し恥じて下さい」、私が理想とするのは「真当の愛」です、その愛は「双方の生活と仕事と双方の人間を尊重しあう」「確かな生活」と「真実の生命」を支えるものです、と言ひ、繰り返される私自身の「成長」、「仕事」、「生活」の達成には「双方が双方の生活と仕事と双方の人間を尊重しあう」人との「愛」があるとも述べているが、美しく優しく賢い女性が好き、とも繰り返されていて、この「好き」には高い精神性を伴うロマンティックな関係が意識されていたかと思う。この時代にこの見識は見事であるが、ここに一枝のセクシュアリティがみてとれる。『番紅花』の編輯で画期的なのは三、四、五号（1914:5-7）掲載の青山菊栄訳のカアペンターの「中性論」である。三号の「編輯室にて」に、青山菊栄と話しあっていたとき、「同性恋愛は異性間のそれよりはもつと精神的なものでそれを善い方面に導けば一方が他をどんなにも感化誘導してゆけるものだ」というカーペンターの説の「面白」さが話題になったとあるが、それをすぐに取り入れた編輯感覚を評価したい。二〇世紀初頭の同性愛解放の担い手として著名なエドワード・カーペンターは、同性愛を「病的」「性的墮落」と見ず、彼等の愛は異性愛者よりも遙か

に「精神的」であり、中性および女性の同性愛者は気質から社会的、文化的な事業参加にふさわしく、人類の発展への貢献度も高いと述べ、対立論者こそ「無智」「偏見」「讒誣」と批判し、女の同性愛は女性解放を実現させる「熱烈な恒久的な力」と評価する。同誌掲載の菅原初の「動揺」は「思ふ存分に自分の仕事がしてみたい」と思う女性教師とのお互いの「霊」が触れ合い、「内的生活」を分かち合い、互いを力づけ承認しあう高い精神性を伴うロマンティックな関係を描いている。松井すま子の「最近の不平」(四号)は、芸術家として性を超えた矜持に立っていて、カーペンターの説く「中性論」の現実例となっていて、「中性論」は一枝の「自分の生活」の解説にもなっている。

同性愛が性的墮落とされていたこの時代に、一枝の先見的感性、意識は瞠目される。『番紅花』に見られる同性愛思想は、吉屋信子文学を生み出す素地として歴史的意義を持つと「クイア研究」は位置づけている。

### 結婚の陥穽

『番紅花』が六号で突然廃刊になってしまったのは恋の高調が、鹿澤温泉で待つ憲吉の許に一枝を走らせ、憲吉に「人となりたる、よろこび」を与えてしまったことによる。この時代は貞操が厳しく前提された「良妻賢母」で女性造りされていたのに一枝はなぜ応じてしまったのだろうか。習俗打破からだったのか。突然の『番紅花』廃刊は、もし妊娠していたらという不安、恐れから結婚を急がねばならぬ現実に直面してしまっただらう。世間には隠蔽されていたこのことに一枝は苦しんだらう。結婚後、安堵での生活は憲吉の都会嫌いと一枝の田園幻想によるとされているが、一枝の心の底には『番紅花』廃刊原因への苦悩と責任感と逃避があったのではなかったか。安堵の自然は美しかったが生活は意想外だった。かつて、アンビシャス・ガールであった新宿中村屋の創業者相馬黒光が「険悪で猥褻」な「田舎の嫁御」の生活に泣いた轍を一枝も踏むことになったのだった。黒光の嘆きを嘆く一枝の苦悩を近代をくぐってきた憲吉は生家を離れて「家」を造ることで救う。富本芸術における「大和時代」となった榎屋生活時代である。

陽と陶二人の子の母となった一枝は母性主義者となつたらいてうの影響があつたのか、ルソー、フレイベル、ストナーなどを読み込んで育児に精魂を傾けるが同時に、まだ進路を決定していなかった憲吉が陶器の道で、日本では行われていなかった独自の技術を編み出していく刻苦奮励の時代を一枝の生得の鑑賞・審美眼による嘘のない正直で憲吉の芸術を育てることになる。一枝の審美・鑑賞眼を信頼する憲吉は一枝に意見を聞く。一枝は臆せず言う。焼き上がった陶器を真っ先に一枝に見せる。一枝は斟酌しない。一枝の鋭い批評に焼き上がったばかりの作品を木っ端微塵にたたき割る場面を、娘の陽も、憲吉の芸術を認め愛して後に「富本記念館」館長を勤めた辻本勇も何度も見ている。世界の陶芸家への道に一枝の存在は欠かせない。一九一七、一八年には東京で「富本憲吉夫妻陶器展」が開催されているが、憲吉作の作品の下絵を一枝が描いているのも多いと記念館副館長の山本茂雄は言う。

読書家の一枝は娘たちにも本を与える。娘のために父はカタカナ、ひらがなのカードを作り、おままごと遊びの道具を焼く。一枝は字を覚えてしまった満四歳半になった陽を連れて奈良女高師(現奈良女子大)に通う。一枝を慕う女高師生徒たちを娘の授業の終わりを待つ間、美術館や

博物館などに誘って喜ばれるが、彼女たちは安堵の家まで押しかけてくるようになる。その中で最も熱心で、やがて泊まり込むようになり、避暑の長期滞在にも同行するようになったのは後の丸岡秀子となる井手秀子だった。娘が学齢期に達した時、知識力の差から学校嫌いになることの懸念から許可を得て、六歳と四歳の生徒二人の私設富本学校を近くの空き家を教室に、小原国芳紹介の「先生」を招いて開設する。私設学校は、『安堵町史 本編』（1993:3、安堵町）に記載のある被差別部落の子どもたちと肩を並べることへの差別視と見るむきもある。陽の提案による家庭雑誌『小さき泉』が作られている。「老号」の発行日は一九二二年一〇月十五日と書かれ、私設学校の教師も参加で、全員が本気の絵や文章を載せている。五号で終わっているが、一番の活躍者は陽である。ついでに言えば、一枝も陽も当初から西暦使用で元号不使用は一貫している。元号は「君主」の時間に民衆を従わせる制度で、中国に倣って日本では「大化」に始まるが、本家本元の中国はとくに西暦使用になっていて、元号使用は世界で日本だけである。まさに時代錯誤であるばかりか、「令和」は日本最古の歌集『万葉集』によると政権は胸をはったが、『万葉集』は「海ゆかば」に象徴されるが、戦時下、軍国歌謡として広く歌われ、「忠君愛国」の皇国イデオログを積極的に果たした歌集なのだ。元号は使いたくない。

憲吉がバーナード・リーチと一緒に仕事をするようになり、憲吉の仕事が軌道にのると来客が増えたが、一枝の接待の居心地よさから泊まりも含めて更に増えている。リーチは妻同伴も屢々だったが、『白樺』のメンバー、わけても長与善郎夫妻や有島武郎などのほか来訪者は多彩だが、創設（1921）された自由学園の第一回生が卒業旅行で羽仁もと子に引率されて奈良に来た時、みんなはこの家に泊まっている。その生徒のなかに後の石垣綾子や村山籌子がいて、一枝の人となりに衝撃を受け、その後「人生の指針」を求めて頻繁に訪ねるようになっていく。「多くの女性に恋心を抱かせる不思議な美しさ」に「心惹かれ」泊まり込みでおしかけ、一枝の側で寝たくて蚊帳に入り込んだこともあったと綾子が後に書いている。庭には季節を通して花が咲き乱れ、果物や野菜にも事欠かない。憲吉の焼いた大壺に投げ入れられた花がひとときわ映えた大部屋の居間での一枝手造りの料理で食卓を囲む贅沢さを中野重治が書いている。リーチの妻から教えられそれに工夫を加えた、パン、マフィン、クッキー、ジャム、ローストビーフやウーフ・ア・ラ・ネージュなどで来客を喜ばせたが、一枝の作る料理は味噌汁にしても出汁を疎かにしない玄人はだしだったという。井手秀子が入り浸った富本文庫には読書家の一枝によって集められた本がびっしりで誰でも利用が許されていた。

夫、子、そのほかの多くの人からなくてはならぬ人と頼られて忙しく一日を終えた一枝を襲うのは、私は私を生きたい、生きたい生き方を生きていると嘆きだした。井手秀子が初めて紹介者も無く安堵の家の門をたたいたのは、雑誌に載っていた一枝の詩への感動だったという。詩やエッセイを書いてはいたが「仕事」として満足してはいなかった。秀子は一枝が夫を「主人」と呼んだことに驚いている。夫婦対等観から一枝は生涯「主人」不使用だった。秀子に農村女性問題の重要性を話し、その面で力になれる人として丸岡重堯を紹介し、名著『日本農村婦人問題』（丸岡秀子）への道筋をつけている。草木染で人間国宝となった志村ふくみも染織作家への道には一枝がいる。三十一歳で二人の子を抱えて離婚したふくみの染織を仕事とする道は一枝に負う所大きく、「骨身にこたえる鋭い批評」や励ましのことばや手紙を何度も貰ったが、一枝の手紙は、「巻紙の上に、花とかけば花が、風とかけば風が舞い、美が充満してくるような文字であり、達意の文章」（二色一生）だったと



語る。『青鞥』時代からの仲間だった神近市子には新聞記者の道を紹介し、「日蔭茶屋事件」で入獄後も一貫して親交し、女性解放運動家の活動を援けている。この種の例はなお多い。敬愛の念を持ち続けているらしいのが時代に呑み込まれて皇国史観に立った戦争指囃、優生法賛成、早々の疎開を先見の明と自讃するようになったのをどうみていたのだろうか。戦後は疎開地に居続けるつもりだったのを一枝が引き出したことで女性史上に刻印される人となっている。一枝は生涯にわたってらいてうへの敬愛の念を持ち続け、この家族に温かい手を伸ばしているがらいてうは一枝に冷淡だ。その他列挙の繁を省くが、一枝によって輝きを得た女性は数多い。一枝を知る誰もの一致した評言は、いつも芸術的香気に満ちていて、自己顕示欲や自己の利得計算の微塵もない、人の世話をするために生まれてきたような「道づくりの人」だったのである。

何の報酬もなく、またその期待も無く、人の世話をせざるにいられぬ性情から、本当は文学に生きたかったのに、その道に向って専心、没頭する時間が与えられず、常に所持していたノートに書き留めておいたことを材として書いたエッセイや詩では、晩年の童話を含めたとしても「仕事」として満足し得るものではなかっただろう。一枝の著作は、一枝の魅力を横溢させ、文学史的価値もある「編集室より」や座談会での発言は別枠としたエッセイ・詩・童話が三一九編（黒崎真実作）というが、これだけではない。遺漏作の補充が待たれる。

作家を夢見たこともある娘の陽の擱筆日「一九三五・一二」と付された「明日」（行動）35・3には生きたい生き方が生ききれない母の嘆きの姿が活写されている。瑛子は母が大好きで母とは強い絆で結ばれている。母が結婚した早くも翌年、芸術の道を共に精進することのできる人として結婚したはずなのにそうではなかったと知って父の許を去ることを真剣に考えたが「良妻賢母」躰の軛によって決断出来ぬうちに瑛子が生まれ、この子のためと飛翔欲を抑え込んでしまったが、夫の仕事に付き添い、育児・家事に翻弄される毎日による悶々の嘆きの人生にあってなお諦めきれず、子どもを寝かしつけた後で二時、三時まで読書にふけるそんな母を許さぬ父の怒りの姿をハラハラしながら見ていた幼き頃のことを思い出す。あれから長い年月が経ったが、両親は深く愛し合いながら傷つけあい、打ち合う生活が今も続いていて、母の自己実現への思いも衰えない。そんな母を偉いながらも羨ましくも思うという作品である。

憲吉の芸術に一枝が不可欠の存在であることを憲吉自身よく知っていた。そこには一枝の本当に生きたい生き方は勘定されていない。矛盾するようだが相愛相敬は崩れていない。ところが、憲吉が井手秀子の紹介によったお手伝いさんと男女の関係になっていたことを知ったのだ。二年も前からだったと知って、一枝はのけぞった。娘を動揺させてはならない。家庭内離婚を気付かせないように日常生活維持に苦悩を倍加させた一枝に憲吉は頭を低くするしかない。

夫の女性問題を知ったのは何時だったのか。一枝は小説として「貧しき隣人」（婦人公論）1923・3、「鮎」（週刊朝日）1926・10、「鼠色の廃館」（『女人芸術』1931・4）を書いている。「貧しき隣人」は病身の息子と暮らす被差別部落に住むお篠婆が頻繁に持ち込む草箒と草履を「私」はいつも買ってしまう。物置に溢れかえっているのに断れぬ「私」を怒る夫と諍いになる。お篠婆が姿をみせなくなる。ほっとしながらも「私」は不安になる。息子の病気が悪かったからとお篠婆が久し振りで姿を見せた時もらった「しばらく顔をみると寂しい」の呟きに「私」は人間の真実を感じる。差別視を憎む者と差別意識を内在させた人が対比されている。「鮎」は優れた心理小説である。一九二三年六月の作で、未知の

島崎藤村に批判を仰いでいる。藤村から「好いお作」だが深刻な作品なのでモデル問題が心配と返事があったが、「鋭い感知力なし」には「叶はぬ」、「鮎」を「象徴にまで持つて行つ」ている作品と評価した推薦文が付されて『週刊朝日』に発表されたのは三年四ヵ月後だった。この遅れは「新生」問題によるだろう。読書家の一枝が『新生』を読んでいるはずはないのに藤村にあづけたのは何故か推測しかねる。作品は、愛する夫との生活に泥靴でずかずかと入り込んで来て、夫の情事を面白げに暴いたりする夫の甥の安吉へのお新の憎悪、嫌忌は深い。夫が釣りに出かけた後、寝室を片付けているところへぬっと顔を出し、無遠慮にじろじろ見る安吉に虫唾が走る。帰った夫から安吉は途中で帰ったと聞きほっとする。魚籠の中の柳ばやの美しさにみとれていると、底のほうから大きな鮎がよるよると浮き上がってきた。安吉が釣ったのだという。死んでしまう前に鉄砲和えに料理してくれと言う夫の目を盗んで渾身の力をこめて放り投げ、「指先に残つた、ぬるぬるした気味悪さを、幾度も幾度も拭ひとつ」と言う作品。一枝が愛し信じきっていた憲吉の裏切りを知ったのは何時だろうか。この作品の書かれた前年の夏を、一枝は子供たちと尾道に家を借りて過ごしている。憲吉を拒否してだったのか。「鮎」は藤村が氣遣つた憲吉の女性問題を反映させた作品と見て間違いないだろう。「鼠色の廃館」は小説欄に載っているが「長崎風景の一つ」のサブタイトルをもち、「一九三〇年、三月一日長崎に於て」とある掌編小説というより旅行記めいたものである。この年は風雲急な十五年戦争の前夜である。見開き二頁の短いものだが、文中に凶案的に囲んだ「ALHAMBRA AMERICAN HOTEL NO. 40 SAGARIMATSU」を含む三ホテルと「MONEY EXCHANGE」と「BAR」が配されていて、一枝の編集者の才が偲ばれる。「日本唯一の海外文化搬入の大玄関であった」長崎の、「死人の如く枯葉した」鼠色の廃館」が外人墓地のように並ぶ一方で、大資本三菱造船所がさかんな白熱の焰をあげる活気を相対化させている。「私はこの二つの風景にむかつて、明確に相よってくるものを或る波動をしかも間近に感じた」を結語としていて、一枝の時代を先見的に本質を見抜くその感性には息をのまされる。

信頼の度や愛が深ければ深いほど裏切りから受けた傷の痛みは時効はなく深い。一枝は子連れで家まで借りる地方での長期逗留がこの頃多い。憲吉は一枝たちに不自由のないようにいろいろ送っているが「今朝シートを四枚洗濯して今アイロンをかけて居た処が夕暮がせまって来て余りのさみしさに、何だか頭が悪くな」ったなどと同情を求めてもいる。一枝は返信していない。それまでの手紙の「乙様」、「K」または「KEN」が、「一枝様」「憲吉」に変わっている。一枝は友人の東山千栄子の妹で料理研究家の祖師ヶ谷の中江百合子の家に長期居候して、この家から娘たちを成城の学校に通わせている。憲吉からはそろそろ寒くなってきたのでセルを送る、毛布はいらないか、子どもたちは不自由してないか、世話になっている中江家の分と一緒に梨を三箱送るなどと優しく、仕事についても細々と報告し、いろいろ相談したいので一度帰ってきてくれないかと再三の懇願は悲鳴に変わっている。何度も話合いを持ったらしい。憲吉は心機一転を期して大和生活を切り上げ、「千歳村下祖師ヶ谷」に家を建て、ここに窯を築くことにする。何度も話しいいで一枝は憲吉を許す気になったのだろうか、次女の陶誕生から一〇年経ったこの年一九二七年一月に長男壮吉が誕生して憲吉を舞い上がらせている。

### 祖師ヶ谷へ、戦争の時代

武蔵野の面影を残す雑木林を切り拓いた約七〇〇坪に平屋の西洋館で目当てになる入口の赤白まだらの花をつける椿の大樹は一枝の父越堂からの贈り物だ。水原秋桜子の語る「祖師ヶ谷の客間」、『陶説』1956<sup>3)</sup>客間は畳四、五十畳も敷ける板の間に絨毯が敷かれた部屋で窯開けの日は来訪者で一杯になる。南側は一面の硝子戸で、樗の大木が見事だ。畳の部屋は無く、トイレは水洗だった。一九二七年からのこの家この窯の東京時代が富本憲吉を世界の富本憲吉に押し上げたのだが、妥協を許さぬ一枝の審美眼と鑑賞力が富本芸術を磨いたことを誰よりも憲吉が知っていた。この客間は一枝を囲む女性たち、それは美しく知的でそれぞれ仕事に生きる女性たちだが、その女性たちの集まるサロンともなり、女の輪造りの場ともなった。一枝は窯開けにみんなを招待して紹介し、輪を大きくしていく。ここへの文学者、女性運動家の来訪者は名を列挙をし得ぬほど多く、戦争下の息苦しい時代になってからは、声を出して語れ、笑える癒しの場ともなった。また、憲吉不在時に反戦運動家の運動拠点になったりもしている。

一九二九年、『女人芸術』がアナ・ボル論争で編輯が揺れた時、高群逸枝たちアナキスト派に対した一枝を含むマルキスト派が主流となったこの政治的立場から三一年に非合法生活中の蔵原惟人を一ヶ月間匿い、三三年には青年共産同盟へのカンパによって検挙され、二週間拘留で憲吉を激怒させている。この時、一枝と入れ違いに陽も検挙されている。林芙美子も矢田津世子も検挙されるそういう時代だった。周囲が次々と戦争使喚者になっていくなかで一枝に揺らぎはない。『女人芸術』の後継誌『輝ク』を長谷川時雨は戦争、軍部べつたりの指喉誌にしてい、平塚らいてう、平林たい子、宮本百合子までも擁しているが一枝は厳しく一線を画して、戦争荷担の発言は片言もみられない。自他共に認めるオピニオンリーダーの輿謝野晶子が真っ先に戦争謳歌・指喉のリーダーとなるが、らいてうも同列者になっている。ほんの僅かの例外を除いて誰も彼もが戦争謳歌に進み出た時代になっているが、それがたまたまなくてひとときの息継ぎにこの家に駆け込んだ人は多い。干からびさせられた感性が命脈を保つ水分補給の場がここだった。社会的に名の知られた美しく個性的な女性たちによるサロン化を憲吉は嫌がってはいなかった。ここに来る女性たちに「秀子常用」「俊子常用」などのネーム入り茶碗を贈って喜ばれている。「ここには買い出しだ疎開だと、戦争にふりまわされている一般庶民のくらしとはかけはなれた、別世界の優雅(?)があった」(高野芳子)がその「優雅」の持統が困難となり、物資欠乏が人々の生活を圧迫するようになる。サロンの常連になっていた大谷藤子が秩父から持ってきてくれる食料がこの家にとってどんなに有りがたかったか、誰もが感謝していた。空襲が激しくなり疎開が至上命令となって、藤子の好意から藤子の母の里への疎開となる。東京美術学校(現芸大)教授になっていた憲吉が兼任していた工芸技術講習所主事として、資材の調達困難から生徒を連れて高山に疎開したのは四五年春だった。高山の憲吉から、早く秩父に行け、戦争はまだまだ続くと思っていたのだろう、自分も一二月には秩父にいくつもり、すべてを捨てて秩父に早く、早く行くと速達便が連日送られているが一枝たちが秩父に疎開したのは七月に入ってからだった。ひと月も経たずに敗戦による終戦となって、幸いにも焼失を逃れた祖師ヶ谷の家に戻ったものの戦後さらなる悪化の食料逼迫を扶けてくれたのは大谷藤子だった。不規則な交通事情から泊まっていくなことも多くなっていたようだ。

## 憲吉の背信、晩年の嘆き

そこに突如、衝撃が一枝を襲う。憲吉が、一枝と藤子との関係を、肉欲的墮落関係の同性愛・レズビアンと触れ歩いたというのだ。井手文子は水沢澄夫から、憲吉が「あの人はレズビアンだった」と語ったと書いている。四五年九月一日付け憲吉から陽への手紙は、戦後の混乱期を安堵の家で凌ごうと提案したもので部屋割りまで書かれているが一枝は排除されている。とすれば、おかしな噂を誰かから耳にしたのは敗戦直後のようだ。明日の命も知れぬ酷烈な時代を何時も背筋を伸ばして華麗に生きていた一枝をやっかみ、大谷藤子と矢田津世子との関係を知っていた人の告げ口だったのか。それを真偽も確かめず言い触らすような人間で憲吉はあったのか。憲吉は尾竹でも富本でもない新しい家を作ろうと言い、家事や育児も厭わぬ新しさの反面で、皇居の前では脱帽、最敬礼し、紀元二六〇〇年奉祝美術展覧会の委員を務め、「戦艦献納帝国芸術会院展」に出品し、自画集に「この画集を謹んで神鷲に捧ぐ」の献詞をつけたりの思想の持ち主でもあった。一枝の流した涙の大根にはこの思想的乖離もあっただろう。

四五年十月一日付けの陽の一枝宛の手紙には、大谷藤子の「温かさ」に感謝しながら父の嫉妬から両親に軋轢の生じることの苦しさが描かれ、その返信らしい同月二〇日の陽宛一枝の長い手紙には、大谷さんのことがなければ落ち着くというのではなく私がいなければ仕事もできず、私が意のままならぬ事に苛立つお父さんと共に成長しあうのは無理とあり、その後、離婚話がでたのだろうか。年月不明「一六日夕」の陽宛書簡には離婚はむしろ望むところだが、承知は「お父さんの妄想とひどい申し分を承認したことになり、それは子どもたちの名誉のためにも出来ない。裁判になって、「狂人じみた」言いがかりを「しかも夫がそれを吹聴して歩いてゐ」たことが「根拠のない事の実証されたらお父さんはどうなりません」「お父さんのやりかたに沁々つらい泪がながれます。私の性質を悪用したこのやりかたはつくづくかなしいです」などである。この時代、レズビアンと指さされることは、ましてや世界的に名を馳せる夫から他人に吹聴されては社会的抹殺にも繋がるだろう。

## 「手紙待つ」、捨てられた夫

憲吉が窠を閉鎖して大学その他に辞表をだして単身安堵に帰ったのは四六年六月だが、人間としての尊厳をおかされた一枝の怒りは深い。この状況を井手文子はじめ誰も彼もが一枝を「捨てられた妻」と書いている。一枝の生き方を深いところで理解し、評価していた中野重治までが「晩年の富本一枝さんは必ずしも幸福でなかった。静かで安らかな晩年はこの人にあたえられ」ず「苦痛な晩年」だったが「死ぬまで仕事をしたようだった」と書いているがちよっと違うだろう。一枝の晩年は自足していたと思う。捨てられたのは憲吉の方だった。そこを証明するのが一九九六年五月一九日から七月三日まで富本憲吉記念館で開催された「安堵帰郷五〇周年・富本憲吉書簡展」『手紙、待つ』——安堵から妻に宛てた二〇通』の、一九四六年九月二一日から四七年にかけての一枝宛の憲吉の手紙である。

一枝をレズビアンと吹聴し、家族の絆から排除しさえしたのに、激情が去って正気を取り戻したのだろうか、二一日の手紙はけろっとして以前の憲吉に戻り、家族を思いやっている。次の二八日では、戦後の農地改革に関わる財産問題の相談をしたい、来てほしい、十月なら正倉院展



も見られるからとあり、先日送った一万円はチビチビせずに使って欲しいともある。その後の手紙も、一度東京に「帰りたいたいが繰り返され、四七年二月四日には「一人ではやっていけない」「かなしい気持ちで居る」とある。お金も突き返したのか「兎も角一万円は受け取り乞ふ」とあり、身体の変調を訴えている。この後も二月の一五、二二、二七、二八日と立て続けの速達便には「秩父の谷間に住み絵を描いて余生を送りたいともある。二人は晩年を共に絵を描いて過ごしたいと話合っていたのだった。一枝は返信していない。返事がないので心配で朝まで眠れず身体が弱っている、チケットが入手できれば一カ月ほど東京の家に「帰りたいたい」、「この手紙つき次第近況御報告」とあり、三月に入ってから祖母ヶ谷に行った頃は、二人とも若くてケンカしながらも協力して貧乏にも耐えてあれだけのものを造りあげてきたじゃないか、会いたい、「余命いくばくもない」のだ、ちよつと顔を見てすぐ別れるのもいいから会いたい、「近いうちに死ぬのではなかるふかと思ふ」、「胃ガン」かもしれない、「手紙待つ」と切実である。世界の陶芸家として頂天に立ったこの東京時代、「ケンカしながら協力」した毎日は、自分を生きられない苛立たしき、哀しき、自虐に泣いた日頃でもあったことを思う一枝は此の期に及んでもなお自分本位の憲吉が許せず憲吉の感傷に引き込まれない。「東京より手紙なし、待つ」の連日の速達便は書巻展入場者の胸を打つただろう。憲吉は返事のなさに戦術を変える。京都まで出かけて長距離電話を至急電で申し込むが戦後の混乱は電話事情にも影響して深夜まで待つが繋がらない。連日の京都通いもダメだったと速達便に戻る。身体の不調、老いの自覚から死を思い、孤独の寂しさを訴える。四七年五月に、新匠美術工芸会の高島屋で開催の第一回展のために数日東京に帰っているが祖母ヶ谷の家は居心地いいものではなかったらしい。四八年二月の手紙には「かへれば火宅」、それを言ってもあなたを憎めず「三〇年一処に居たあなたを子供からはなれて呉れとも自分に好きな人があるから分かれて呉れとも言はない」、三〇年も一緒に生きてきた「相棒のあなた」だが「アキラメタ、この人間をあはれと思はないか」とあって、この時期には彼の世話をする女性——それは石田寿枝だろうか——がいたようだ。

返信の無い一枝を諦めた憲吉は糧道を断つ挙にでる。これまで生活費の主体者になったこともなる必要もなかった一枝が五十三歳になって自立せざるを得なくなる。先ずは中村汀女の支援だった。夫の転勤につきそって持てる能力を満開させ得なかった汀女に、編輯を引き受けて主宰誌『風花』を発行させたのだった。この俳誌は成功し、汀女は俳壇で名を挙げた。ホテルニュージャパンで開催の百号記念会は評判を呼び、講演会や講座が開設されて、カルチャーブームの魁となった。この頃、離婚した由起しげ子が四児を抱えて途方に暮れていたのを知ると自分の生活困窮を省みずに奔走し、グリム童話の翻訳や童話の創作を勧めて編集者を紹介している。その後、由起は一枝が紹介した『作品』に発表した「本の話」が芥川賞の戦後復活第一回を受賞した作家になっている。

子どもに好い本を読ませたいが口癖だった一枝は生活の方途として児童書出版を思い立つ。資金は藤子の従兄弟の子にあたる野口守茂が山の本を売って提供してくれた。陽と二人で始めた「山の木書店」は現在に至るも名著として読まれ続けている吉野源三郎の『人間の尊厳を守ろう』を第一作として、第一回児童文学者賞・児童文学賞受賞作となった壺井栄の『柿の木のある家』を含む五冊を出して倒産した。金勘定ゼロ育ちには無理だったことを思い知る。この書店には後日談がある。「子供たちが自由に良い本を読めるような、そんな場所をつくりたい」と言い続

けていた一枝の夢は「山の木文庫」として地域の子どもの読書を通しての集会所が孫たちによって果たされ、今に続いているという。

奈良に帰った憲吉は自分の窯を持たず、仲間や知人の窯を借りる放浪の陶工で過ごすのが京都時代は、外国人を喜ばす華やかな金彩、銀彩による「人工の美」で一時代を築いたものの、富本芸術は庭の定家葛の五弁花を四弁花連続模様に変化した「赤更紗」や「端正なフォルム」の白磁などに代表されるが、富本憲吉の名を不動にしたのはこの「東京時代」である。一九四二年三月、東京高島屋で開催の「富本憲吉個人展覧会」は圧巻だったと記録されている。二人三脚できた「私達の仕事」の成果である。

借金を残しての倒産は貧をも豪胆にやり過ごしてきた一枝を氣息奄々にさせたが花森安治が拾う神となってくれた。山の書店の負債を引き受け、童話発表の場を与えてくれたのだ。文学への思いは最晩年になってある程度は叶えられたのではないだろうか。一枝の書く童話が『美しい暮しの手帖』（五四年から『暮しの手帖』に載ったのは五一年六月の「奥さんと鶏」からだが、以後、ガンによる臥床の身になる六五年七月までほとんど毎月の六八編を連載している。このなかから四〇編が選ばれて『お母さんが読んで聞かせるお話』A・B二巻本として藤城清治の切り絵の挿絵、花森安治装幀で一枝にとって唯一の著書として刊行されたのは、一枝没後六年の七二年一月だった。

三十三歳位若い石田寿子と山科御陵壇の後に吉村順三設計の和邸に憲吉が移り住んだのは六二年六月だが、五五年に第一回重要無形文化財技術保持者（人間国宝）、六一年の文化勲章受章で憲吉の名はさらに高まっているが病状も進んでいた。六二年二月、入院中の憲吉を見舞いに行くとこの陽に一枝は手紙を托した。石田が席を外したちよつとの隙に渡したそれを読んですぐに陽に返したがそこには縹色の紙に見事な筆字で、「遇ふことを 夢なりけりと思いわく、心の今朝は 恨めしきかな 西行 あたたかな春日のいちにちもはやくきておからだのためによい日となるようねんじ居ります」とあった。危篤の報に壮吉と駆けつけたのは死の二日前だった。石田は側を離れなかった。葬式には戸籍上の妻である一枝に石田が並んだという。死の一カ月前に選任されていた京都市立美術大学長としての退職金その他、山科の家も憲吉の作品も、その権利なども総てが石田の手に渡ったが無欲な一枝はその処置に恬淡としていたという。「私たちの作品」は一枝に遺されていない。一枝は晩年を生き生きと生きている。『暮しの手帖』に連載を続けながら『大法輪』『新婦人しんぶん』などに含蓄のある文章や世界を視野に取めた明晰な時事的問題を扱った随筆が光る。気付かぬうちに病は進行していた。臥床にあっても書き続けたベトナム戦争や文化大革命への先見的な透徹した歴史観による批判や疑念の書かれた文章の末尾の（紅）にこめられたであろう万感の思いに読者は想像力を羽ばたかさせられる。

#### 女性解放とレズビアニズム

以下、早口で一枝における「女性解放とレズビアニズム」について述べておきたい。らいてうとの「同性の恋」の時代の女性同性愛は「肉欲的な墮落関係」視されていて、紅吉は批判にさらされたがめげることはなかった。一枝におけるレズビアニズムを辻井喬の『終りなき祝祭』、時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない中山修一の『著作集3・4・11巻』は一枝を性的墮落者と決めつけて猥褻に描いているが、一枝は中山が決めつけているような猥褻な「性的転倒者」だっただろうか。

今、時代は多様性を尊重するジェンダーレスのジェンダーフリー社会を目指して進んでいる<sup>6)</sup>。一枝は当時の女性の平均から一五センチ以上も高い長身で『青鞥』時代は「男のような鼠の縞セルの袴」で胸をそらして歩いていったという。袴は六曲一双の屏風絵を描く上で着物の裾がはだけるので必要だったのだ。一枝は紅色が大好きだったが服装には取り入れていない。一枝の美感覚によるおしゃれからだ。生涯和服で通したが例えば「黒い麻のキモノに白い博多帯」のような一見地味だがよく似合い、艶っぽかったと多くの女性が一枝のおしゃれ感覚を褒めて語っている。『青鞥』の座談会で、そんな着物姿に「男もののような桐の柾目の分厚い下駄」の一枝を居合わせた編集者たちが「いちばん素敵」と声を挙げたと井手文子書いている。一枝の服装は近年注目のユニセックスだったのだ。中野重治の「男のような立派な字を書く人だった」は志村ふくみも言っている。「男のような」がつきまとう一方で、「上村松園の絵から抜け出したような佳人」(柳田ふき)は、これまた誰も一枝評だが、中野重治が一枝の「くれたがり」はまさに「日本の古い女」のそれだったと書いている。お料理上手、細やかな気配り、思いやりの深さなど他に類を見ぬとも多くの人に語られている。鉱山労働者の子として生まれて貧困が常態の歌大好きな松田解子に來日したシャリアピンの五円もする高価なチケットを自分の生活が困っていた時なのに買ってくれた、あの時の嬉しさは生涯忘れられないと余ほど嬉しかったのだろう、私は何度も聞かされた。着ていた着物を脱いで貰ったという人もいる。「もともと控え目な方で、自己顕示欲を徹底的に嫌った方」とはみんなが言い、自分をさしおいて他者の為には力を尽くす人だったが、呆れる程の恥ずかしがりやで運動の先頭に立つことはなく蔭できっちり支える人で、他者のためには何処までも強くなれたのに自己に対しては飽くまでも含羞の人だったが一致した一枝評だ。だが、五五年六月の第一回日本母親大会開催で参加者二〇〇〇人のどよめきに「日本の女の歴史が一ページめくれたのよ」と、誰かれ構わずに手を握り腕を掴まんばかりに興奮して大声をだしていた一枝の姿が多くの人々を感動させたというエピソードが語り伝えられているが、この言葉が母親大会の合言葉になったという。「人の世話をするために生まれてきたような人」だったが「彼女ほど多くの友を愛し、多くから愛された人は珍しい、誰の心にも美しい思い出を刻んでくれていまも余韻が残る。世紀のロマンティストだった」(柳田ふき)、女が自分の持てるものを満開させられるようにならなければだめと熱っぽく語り、その実現を目指して能力を持った女性を押し上げることに真剣に取り組んだまさに「道づくりの人」だった(林小枝子)とも。多くの女性を愛した一枝は多くの女性たちからも愛された。一枝は近代を体験してきた男性の鷗外や憲吉を惹きつけた魅力的な女性だがこの二人に限らず、例えば『白樺』のメンバーたちなどの男性と公然と対等につきあうこの時代では画期的なことだがジェンダーレスを実現した女性だったと言えるだろう。

男同士の同性愛は容認されながら女性の場合は性的倒錯として汚穢視・嫌忌され、揶揄、批判されることが多かったようだ。らいてうと紅吉の「同性の恋」は世間からスキャンダル視されたが二人は昂然の気概で対していたのに、奥村博に出会ったらいてうは「レズビアニズムの排除」に変わる。一枝にぶれは終生みられない。

以下寸言でまとめる。尾竹・富本一枝は女を愛する女性だった。差別、低位置視されている女性が真つ当な仕事を出来るように手助けし、自らも自分の仕事を通して生きたい生き方を生きようとして闘い通した人だった。女を愛するとはどういうことか。同性愛には性的墮落を伴う「遊

戯的な愛」と「真つ当な愛」があり、「真つ当な愛」は女性解放思想に結びつく。一枝における女同士の親密な関係を検証するとどの場合も精神性が重視された「真つ当な愛」で女性の能力発揮、換言すれば女性の地位向上、女性解放に結びついている。だとしても女性を愛する女性の一辺倒ではない。多くのよき男性たちから好意を持たれて対等に交流しているが、それは他に例を見ぬほどに人間の女の賢さ美しさ優しさをもった女性だったからと言えるだろう。

異性愛者を前提した社会制度はまだまだ健在だが、台湾での同性婚合法化が三年前にアジア初で実現したが、セクシュアリティ問題はデバツグ（不具合を発見、改良する作業）していかねばならぬのが今日の課題だろう。一枝は現代を先取って生きたまさに「新しい女」だった。

- (1) 「女性解放とレスビアニズムの間——『番紅花』における女性同性愛言説をめぐって——」（名古屋大学人文学研究科「人文学フォーラム」第5号、2022・3）
  - ① 『青轡』におけるレスビアニズムの再考」（『女性学』29号、22・3）
  - ② 赤坂香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』（角川学芸出版、2011・2）
  - ③ 古川誠「セクシュアリティの変容…近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」（『日米女性ジャーナル』17、1994・12）
  - ④ 肥留間由紀子「近代日本における女性同性愛の「発見」」（『解放社会学研究』17、2003）
  - ⑤ 『青轡』は平塚家から出してもらったらいてうの婚資の百円によって、『女人芸術』は時雨の事実婚者の三上於菟吉の出資によって創刊されている。
  - ⑥ 拙著『與謝野晶子』（新典社、1998・10）
  - ⑦ 多様性を尊重する流れの一つの表徴に「投票所入場券」の性別欄廃止が市町村で進んでいる現実がある。